2024年1月9日

博士学位審査　論文審査報告書（課程内）

大学名　早稲田大学
研究科名　大学院人間科学研究科
申請者氏名　姜　来娜
学位の種類　博士（人間科学）
論文題目（和文）　報酬系知覚の特徴に応じた認知行動療法型ストレスマネジメント支援の体系化
論文題目（英文）　Systematization of cognitive-behavioral stress management support according to the characteristics of reward system perception

公開審査会
実施年月日・時間　2023年12月11日・12:00-13:30
実施場所　早稲田大学　所沢キャンパス　100号館　　第四会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	嶋田　洋徳	博士（人間科学）	早稲田大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・教授	田山　淳	博士（障害科学）	東北大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・准教授	大月　友	博士（臨床心理学）	広島国際大学	臨床心理学
副査	関西学院大学・教授	大竹　恵子	博士（人間科学）	神戸女学院大学	健康心理学

論文審査委員会は、姜来娜氏による博士学位論文「報酬系知覚の特徴に応じた認知行動療法型ストレスマネジメント支援の体系化」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1　公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1　**コメント**：中間報告会以降、主査および副査のコメントに適切に対応した修正が行われており、明確な論文構成となった。さらに、調査研究から実験研究、介入研究に至るまで丁寧に積み重ねられており、有意義な研究であると言える。

1.2　**質問**：研究３は小学生を対象として、その他の研究は健常な大学生を対象としているが、どのような前提をもって研究デザインが組まれているのか。

回答：研究３の前提として、その目的に照らし合わせ、派生的関係反応（derived relational responding: DRR）が十分に成立していないと想定される小学生を対

象とし、大学生は十分にDRRが成立していると想定して対象とした。すなわち、言語の発達段階（DRR成立の安定性）を軸として研究デザインを組んで対象者を選出した。

1.3　**質問**：BIS（behavioral inhibition system）と状態認知的フュージョンの関係性について、当初の仮説と実際の結果の差異はどのように考察しているのか。

回答：当初は、BIS優位な者は罰を回避する傾向が強い特性を踏まえて、ストレッサーに対するDRRの成立および流暢性が高いことによって、状態認知的フュージョンが高くなることを想定していた。実際には、BIS優位な者が一様にDRRの成立および流暢性が高いのではなく、そうではない者が混在していたと解釈している。

1.4　**質問**：BIS優位からBAS優位にシフトするという本質的な介入は考えられるのか。

回答：BIS/BASは気質的側面であるために、BIS優位な者がBAS優位にシフトすることは積極的に想定できないが、自身の特徴を踏まえたコーピングを獲得することによって、結果的にBAS優位な者の特徴に近づけることが可能であると考えている。

1.5　**質問**：BIS優位な者の状態認知的フュージョンが、認知的評価に対しては直接的に影響し、コーピングやストレス反応に対しては間接的に影響するという前提であるが、そのような結果が得られなかったことはどのように考察しているのか。

回答：前提はその通りであったが、結果的にコーピングとストレス反応には直接的な影響が見られた。これはプロセスの初期に生じる反応と終期に生じる反応を十分に区別して測定できなかったことに起因していると考えられる。

2　公開審査会で出された修正要求の概要

2.1　博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1研究１の介入方法について具体的にどのような手続きを用いたのかについて、その時間配分も含めて明確に記述すること。

2.1.2BIS優位な者の中であっても、一様に状態認知的フュージョンが高いわけではなく、DRRの成立や流暢性の高さによってフュージョンの程度は異なるという交互作用が得られたデータについて結果の項に明確に記述すること。

2.1.3研究６の結果について、BIS優位群とBIS/BAS高群との介入効果に差がなかったことについても考察に加筆すること。

2.1.4研究６におけるストレス負荷直後の介入効果と特定のストレッサーの存在を仮定しない介入効果の理論的位置づけについて明確に記述すること。

2.2　修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

2.2.1研究１の介入方法について、時間経過に伴って用いた手続きの詳細（教示、エクササイズの手順等）を、第２章に加筆した。

2.2.2BIS優位な者の中でもDRRの成立や流暢性の高さによってフュージョンの程度は異なったという旨を第６章の結果、および考察の項に加筆した。

2.2.3本研究においては、ストレッサーに対する反応性を検討しており、結果的にBASの程度にかかわらず、刺激に反応するBISの影響が強かったことが示され

て、これに基づき、BIS優位な者ばかりでなくBISの程度が高い者に関する考察を第８章に加筆した。

2.2.4ストレス負荷直後は対象者が一様に経験したストレッサーに対する即時的（状態的）な効果を想定しており、平時は特定のストレッサーの存在を仮定していない（個人によって異なる）ため、普遍的（特性的）な効果を想定していた旨を第８章に加筆した。

3　本論文の評価

3.1　本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は、BIS 優位な者におけるストレッサーの派生要因を同定し、ストレス反応の低減に有効な認知行動療法型ストレスマネジメント（CBSM）の効果検討を行うことを明確に目的として設定している。この目的は、効果的な支援方法を臨床心理学的観点および手法から検討している点において妥当であると判断できる。

3.2　本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文では目的を達成するために、ストレッサーの派生要因の１つである DRR を操作する実験的手法を用いて検証している。したがって、本論文の方法論は明確かつ妥当であると判断できる。なお、本論文で実施した実験の手続きについては、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」（研究１：2019-317、2021-179、研究２：2019-368、研究３：2021-180、研究４：2022-457、研究５：2020-066、研究６：2020-027）、和洋女子大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」（研究３：1924）の承認を取得し実験の前には参加者に対して実験内容についての十分な説明を行い、インフォームドコンセントが得られた上で実施したとしており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。

3.3　本論文の成果の明確性・妥当性：本研究の成果は、脱フュージョン・エクササイズを加えた CBSM が、ストレス反応の軽減において有効であることが明確に結果としてまとめられている。これらの結果は BIS 優位な者の心理的ストレスの発生メカニズム、その改善を目指す臨床心理学的支援に関する実証的知見として妥当であると判断できる。

3.4　本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。

3.4.1先行研究においては、ストレス反応が高い BIS 優位な者に見られたストレッサーの派生プロセスについて検討した知見は見受けられない。この点に関して、関係フレーム理論における派生的関係反応と刺激機能の変換に着目した観点は独創性を有すると考えられる。

3.4.2先行研究においては､BIS/BAS は気質的特徴であるため変容が困難な個人差として位置づけられていることが多い。本研究は変容可能性が高い「状態認知的フュージョン」の観点から BIS 優位な者の特徴の理解を試み、既存の理解や支援の枠組みを拡張する新規性を有すると考えられる。

3.5　本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1本研究は、ストレス反応が高くなりやすい者の心理的メカニズムとして、派生的関係反応の成立と流暢性の高さから生じる認知的フュージョンによって説明が可能であることを示している。この知見は、心理的ストレス支援において、生物学的側面に関するアセスメントの重要性を学術的に裏づけるものである。

3.5.2本研究は、気質的に有効なストレスマネジメント支援の提供が困難であるとされる BIS 優位な者に対して、そのメカニズムに対応した効果的なストレス支援方法を提供している。この成果は社会的にすぐに還元できる側面を有しており意義があると考えられる。

3.6　本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

3.6.1現代社会において心理的ストレスメカニズムの解明、および支援の体系化は人間科学が取り組むべき重要なテーマの１つであると考えられる。本研究は、介入効果が得られにくかった者に対する支援方法を具体的に提供している点において人間科学に対する寄与があるといえる。

3.6.2本研究のストレスマネジメントに関する知見は医学や生物学、社会学をはじめとした他の学問領域との相互理解を可能にするものであり、人間科学の発展にも資すると考えられる。

3.7　不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

4　学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

・Kang, R.N., Tanaka, Y., Sato, T., Maeda, S., Shimada, H.：2023　The development of a Japanese version of the state cognitive fusion questionnaire.　*Japanese Psychological Research*, in press 論文番号 12453.

・姜 来娜・田中 佑樹・佐藤 友哉・嶋田 洋徳：2023　認知行動論的ストレスモデルにおける行動抑制システムおよび認知的フュージョンの役割　行動医学研究, 28 巻 1 号, 2-12 頁.

5　結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上